

地区安全特集：中国がチベット地区の軍事力を再び強化

漢和防務評論 20181006(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は、インドとの国境紛争に対処するためチベット地区への軍事力配備を強化しつつあります。
特にラサのゴンカル飛行場、さらに西のシガツェ飛行場には大型輸送ヘリを配備し、陸上兵力の迅速な輸送力を確保するとともに、戦闘機、戦略無人偵察機「翔龍」を配備しています。

KDR 東京特電：

今年の中印間で首脳会議が開催されたとは言うものの、チベットへの中国の軍事力配備を見ると、いささかも緊張緩和は見られず、むしろ配備は強化されている。第一に、シガツェ飛行場とラサの防空戦力はさらに強化されている。シガツェ飛行場は、2017年に2本目の滑走路が建設され、現在大量のヘリが配備され、国境地区への兵力展開の迅速化が図られている。6月に13機の大型ヘリが展開した。機種はZ-8Kシリーズの可能性もある。シートで覆われた地对空ミサイル陣地には、2017年9月からミサイルが配備されている。HQ-9である可能性が極めて高い。10月に一時撤収したが、11月に再度展開した。今年になって断続的に進駐している。

注意すべきことは：3機の戦略無人偵察機”翔龍”がこの地に配備されたことである。この種の戦略無人偵察機はすでに3個の基地に出現している。中印国境を全天候下で偵察している、と思われる。この種の無人偵察機は珠海航空ショーで展示された。したがってデータはある程度揃っている。しかし輸出はされておらず、中国空軍だけが装備している。ペイロードは600KG、最大巡航高度は20000M、作戦行動半径は2500KM、航続時間は10時間である。したがって3機あれば24時間の全天候偵察が可能である。

600KG以下のレーダー(サイドルッキング機能保有)、テレビセンサー、“北斗”衛星航法システム、を搭載し、データリンクによって、インド側の兵力配備状況をリアルタイムで掌握することができる。レーダーアンテナの直径、重量から判断すると、対地合成開口レーダーによって識別可能な距離は200KM以上であると思われる。中国は、2017年に官側のテレビ番組で、この種の戦略無人偵察機が、巡航ミサイル及び弾道ミサイルへ攻撃目標を指示する能力があることを明らかにした。作戦半径が相当長いことから、目標指示の範囲は2500KM範囲となる。6月、J-10が10機配備された。5月には12機であった。4機のJH-7Aも配備されている。このJH-7Aは配備されてから久しい。

またラサのゴンカル飛行場には多くのヘリ、戦闘機が配備されている。2017年12月以降、KJ-500がここに常駐している。2017年以前は、KJ-500がここに出現することはほとんどなかった。2018年6月以降、少なくともJ-10が4機、

J-11 が 4 機常駐している。同時に少なくとも 13 機以上の輸送ヘリも進出しており機動力が強化されたと思われる。

シガツエ飛行場においては、早期警戒機、戦略偵察無人機を主とする偵察体制が形成され始めた。獲得したデータは、衛星データリンクを通じて戦区聯合指揮センターに伝送される。

”翔龍”は、今のところ、多くの戦略方向に出現している。海南島陵水基地も含まれる。2018 年 2 月から、陵水飛行場には 2 機の”翔龍”が出現している。陵水は海軍の飛行場である。”翔龍”が出現したことは、”翔龍”が戦略支援軍に所属したことを意味するのか？2017 年以降は、陵水飛行場に戦闘機は配備されていない。

KJ-500 及び Y-8 対戦哨戒機がここに配備されている。今年 5 月から新たな格納庫の建設が始まった。吉林省四平基地においては、2017 年 12 月、2 機の”翔龍”が配備されたのを発見した。しかし今年 6 月になると、この基地から姿を消した。朝鮮半島情勢に応じて、北朝鮮への監視能力を高めているのであろうか？総合すると、中国の戦略無人偵察機は、それぞれの戦略方向に出現している。このことは、中国の戦略支援軍が国境外 2500KM の目標に対し、偵察、監視、位置確認を行おうとしていることを意味する。

以上